『賤のおだまき』考

伊牟田　經　久

一　『賤のおだまき』のこと

江戸時代末期に鹿児島で作られた美少年物語が、新しい時代を迎えた明治初期の東京で、若者たちに広く読まれたことがある。森鷗外も読んだし、坪内逍遥や徳田秋声も手にした。[1] その美少年の名は「平田三五郎」、物語の名は『賤のおだまき』[2]という。

『賤のおだまき』は、戦国島津の時代、義久・義弘治世のころの話で、美少年・平田三五郎宗次が武士の鑑と称えられた吉田大蔵清家と義兄弟の契りを結び、互いに励まし合って文武にいそしみ、終には慶長四年（一五九九年）の庄内の乱に二人うち連れて出陣し、先に討死した吉田の跡を追って三五郎も敵陣に駆け入り、「死なば共に」の約束どおり、義を貫き通した、という物語である。

すなわち、『賤のおだまき』は男色関係にある義兄弟の物語であるが、単なるポルノグラフィーではなく、《文武両道に勝れた年長者が年少者をいたわり励ましつつ、堅い契りで結ばれ、生死を共にすることで義を貫き愛を完結した、戦国時代のうるわしき義兄弟の物語》と言うべきであろう。白洲正子氏[3]は「男色というのもちょっと気がひけるほど純粋無垢な男の友情譚なのである」と述

べている。

このような作品の意図は、この物語を『賤のおだまき』と名付けたことにも表れている。この書名は、歴史的仮名遣いでは「しづのをだまき」と書く。「しづ」（漢字表記は「倭文」が一般的）は古代の織物の一つで、麻糸などで模様を織り出したもの。「をだまき」（漢字表記は「苧環」が一般的）は「しづ」を織るための糸を玉のように巻いたもの。そこで、「しづのをだまき」は、糸は繰り出すものなので、「くりかへし」の序詞として、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな（伊勢物語・三二段）

のように用いる。『賤のおだまき』の書名もこれと同じであり、《美少年・平田三五郎と吉田大蔵の義兄弟が堅い契りを全うした、あのすばらしい時代を今に取り戻すことができたら良いのに》という懐旧の情が込められている。

二　『賤のおだまき』の成立

『賤のおだまき』の成立と影響については橋口晋作氏に論考[4]があり、教示を受けること多大であるが、改めて『庄内軍記』の「財部軍之事　付、平田三五郎戦死之事」の章との関係を中心に考察してみたい。

1　作者

『賤のおだまき』の作者は不明である。

明治十七年の「叙」「跋」を持つ刊本の「繅絲艶語叙」（原漢文。〔　〕は引用者の注）には、

聞クナラク、「此ノ書、西薩〔西国薩摩の〕婦女ノ手ニ出ヅ」ト。嗚呼、紡織ノ余〔余暇〕ヲ以テ、事ノ此ニ及ブ〔これほどまでのことをする〕トハ。薩ノ人ヲ導クコト〔薩摩の教育には〕素〔もと。積み重ねられた伝統〕有ル、亦以テ想フベシ。[5]

とあるが、この作品の内容・表現から見て「婦女の手」に成ったとは考えにくい。

また、昭和三年（一九二八年）三月十九日の「鹿児島朝日新聞」には、「或る古老の話」として「伊藤仙平どんの戯作であるといふ」とあり、この「仙平どん」とは「薩摩三奇人の一人」で、鹿児島の横馬場（現在の鹿児島市春日町）に住んでいた伊藤三四郎祐成（幼名は仙平、「近々百三十五年忌法要がある」というから一七九四年没か）のことだという記事（「天涙生」と署名あり、森園天涙か）があるが、確証はない。

2　『旧記雑録』に見える平田三五郎

平田三五郎の名は古くから知られており、薩摩藩関係の史料を編年集成した『旧記雑録・後編三』の慶長四年（一五九九年）の次の史料の中に見出せる。

①八二四（『盛香集』より）新納忠元が平田三五郎の死を哀傷した歌。

②八二五（『殉国名藪』より）十一月二十八日の死者の中に平田三五郎・吉田大蔵の名がある。

③八五五（『児玉利昌譜』より）庄内の乱の折に渡瀬の守備に当たった者の中に平田・吉田の名もあり、来訪した安楽大炊介に礼状を送っている。

④八五六（国分安楽家蔵の書状）前記の大炊介の来訪に対する礼状。

⑤九二四（島津義久の義弘宛て書状案）庄内の乱に関する慶長四年十月六日付けの書状。中に平田三五郎・吉田大蔵らの討死を伝えたところあり。

⑥九二五（義久書状抄）前記の義弘宛て書状のうち、平田・吉田の討死を知らせた部分。

①は異伝もあるので、後で改めて取り上げる。

②は、『殉国名藪』（島津家臣で戦死あるいは殉死した者の名を集録した書）から慶長四年の分を引いた中に見えるもの。（十一月）二十八日の日付の下に次のように記す（〔　〕は割注）。

吉田大蔵清盛〔財部の渡瀬を戍て敵と戦ひ死之〕
平田三五郎宗次・平田二左衛門・宮内式部左衛門〔或治部とも〕　同小者一人

四名の死者の名は、『庄内軍記』の記述（4の（5）参照）とほぼ同じであるが、死亡の日が義久の書状（⑤・⑥）と大きくずれていること、吉田大蔵の名を「清盛」とすること（6の「人物造型」参照）、死亡の場所を割注で「財部ノ渡瀬」とすること（次の③・④参照）など、史料としては若干の疑念が残る。

③の『児玉利昌譜』は漢文で記されているが、私に訓み下して引く（表記を改め、傍線を付す。〔　〕は引用者の注）。

慶長四年己亥三月、慈眼公〔島津忠恒〕手ヅカラ伊集院忠棟〔幸侃〕ヲ伏見ノ邸ニ誅ス。子・源次郎忠真、邑〔知行地〕ニ在リテ訃ヲ聞キ、乃チ都城ニ拠リ、十二ノ堡〔とりで〕ヲ置キ、兵ヲ分チテ公ニ叛ク。

特リ貫明公〔島津義久〕富隈ニ老ス〔老いて官を退く〕。乃チ平田狩野介宗応ヲシテ、兵ヲ帥キ、往キテ渡瀬ヲ戍ラシメ、以テ財部ニ備フ。是ニ於テ、実相〔児玉利昌〕及ビ新納四郎右衛門忠陸・平田三五郎宗次・吉田大蔵清家・市成隼人武重・弟藤助武明・中村弥七・弟彦三郎等、亦与ニ之ヲ戍ル。

五月、慈眼公、伏見ヨリ反リ、親ラ将ニ之ヲ討タントス。時ニ安楽大炊介、従ツテ別ノ屯ニ在リ。八月十七日、渡瀬ニ来訪ス。十八日、実相及ビ忠陸・清家・宗次等、檄ヲ飛バシ〔ここは文を送る意か〕之ヲ謝ス。

④はその十八日の礼状である。まず昨日の来訪を謝し、お急ぎだったので十分な話もできず残念だったと記し、「爰元ハさむく候てめいわく〔難儀〕候、いま分にてハかつゑじに〔飢え死に〕可申候」と苦しい実情を書き添え、いずれ対面のうえ申し入れたい旨を述べている。差出人は、児玉四郎兵衛尉実相・新納四郎右衛門尉忠陸・吉田大蔵允清家・平田三五郎宗次の連署、宛名は安楽大炊助殿と前原平兵衛殿の両人である。[6]

この③・④によれば、慶長四年の八月には平田三五郎も吉田大蔵も共に渡瀬の陣にいたことになる。ところが、『島津国史』には「貫明公、忠真定メテ叛クヲ聞キ、

乃チ肥後某ヲ遣ハシテ渡瀬ヲ戍ル」（原漢文）とあるが、平田や吉田のことは記していない。なお、その割注に「国分郷河内村、地有リ渡瀬ト名ヅク」とあり（現在の霧島市国分川内の渡瀬）、②の「財部ノ渡瀬」という割注には疑問が残る。

『庄内軍記』や『賤のおだまき』には、義久公が渡瀬に新関を構えて市成隼人助武重兄弟に守らせたとあるが、これにも平田や吉田の名はない。安楽大炊助あての書状もあるので、③に記すところが史実かと思われるが、他に吉田大蔵の名を「清盛」「康時」とするもの（後述）もあり、なお明らかにしえないところも残っている（『西藩野史』は、志和池の戦いのことは詳しいが、渡瀬や財部の戦いのことは記していない）。

⑤・⑥は、島津義久から弟・義弘に宛てた書状であるが、⑤の前半は、次のようになっている（私に読み[7]、表記を改め、傍線を付す。〔　〕は引用者の注）。

急度〔急いで〕啓せしめ候。仍〔よつて〕内府様の御使者〔徳川家康が伊集院忠真との和を勧めるために遣わした山口勘兵衛直友〕、何事もなく上国なられ、満足の至りに候。早々着船候や、承りたく存じ候。

一、庄内表の儀、上使御曖〔あつかひ。調停、仲裁〕候といへども、源次郎〔伊集院忠真〕和平の始末違変いたすに依り　破れ候ふ間、去る二日、しわち〔志和池城。庄内十二城の一つ〕境へ着陣候ひて、少将〔島津忠恒〕彼の表の如く〔庄内表の方へ〕差越され候。我々事〔義久自身〕は、ここもと堺目多々これ有るに依り、しかと罷り居候。御心得のため候事。

一、右陣取〔志和池の戦い〕のからみとして、財部口へ人衆少々ここもとより差し出だし候ふ処、敵催し行ふに付き、猛く芳戦〔防戦〕候ひて、各粉骨いたし、敵四五人討ち捕り候。手負〔負傷者〕なども多々これ有る由に候。此方には、平田三五郎、朝は分捕〔敵の首を捕る〕仕り、その後戦死を遂げ候。并びに宮内式部左衛門、同前に候。吉田大蔵ことは、

手負にて越度〔落命〕申し候。誠に稠しき軍にて候ひつれども、右の外、人衆何事もなく候ふ間、珍重〔めでたい〕に存じ候事。（以下、略。文書末に「十月六日」とあり）

⑥は、次のとおり。

一、龍伯様〔義久〕より惟新公〔義弘〕へ御状の内財部口合戦、甚だ手きびしく儀（ママ）にて、平田三五郎、朝は分捕、夕方戦死をとげ候。吉田大蔵深手〔重傷〕を蒙り落度申し候。其の外、何事もなく候。珍重に存じ候。

右、日付は慶長四年十月六日とこれ有る由、全文これ無く、略これを写す□なり。

この書状で義久が名を挙げてその死を知らせている平田三五郎と吉田大蔵は、義弘も聞き知っている優れた家臣であったと思われるが、書状ゆえ当然のことながら、二人の素性も年齢も、ましてや義兄弟の契りを結んでいたかどうかも、明らかではない。なお、二人が戦い討死した場所を「財部口」と記しているが、これは財部へ通じる道の入口の意であり、③の史料にある「渡瀬」を指すのであろう。

ところが、それから約百年後に成立した『庄内軍記』では、平田三五郎宗次は「平田太郎左衛門尉増宗の息男」で、「今年三五〔十五歳〕」「容色無双の少人」であり、「吉田大蔵清家に男色の好み浅からず」という関係であったとし、財部の合戦で吉田の跡を追って「古井原上」（現在の曽於市財部町北俣古井原）で討死したと記しているが、どのような根拠に基づくか明らかではない。

ここで注目したいのは、『松操和歌集』（戦国時代から文政までの三百年にわたる島津藩の和歌千三百余首を集成した歌集）に見える、新納忠元の次の歌である。

庄内軍の時、若武者のうたれしなきがらを見て

昨日まで誰が手枕に乱れけん　よもぎが本にかかる黒髪（哀傷歌一〇九八）

「若武者」の名は記していないが、歌の内容から見て、男色関係にあった美少年の死を哀傷した歌であることは明らかである。ところが、この歌は、『庄内軍記』では

富山次十郎（十六歳）の死を哀傷したものとなっており、都城市立図書館所蔵の『庄内軍記』の「拾遺」・『異本二巻本庄内軍記』・『盛香集』（清水盛香が「君臣の嘉言善行を輯録」した書。前述の①）では平田三五郎を悼む歌となっている。同じ歌が、永い年月の間にさまざまに伝承されてきたことがうかがえる。

平田三五郎と吉田大蔵の二人の関係もまた、時代や社会の変化の中で、さまざまに脚色され語り継がれてきたのではないかと考える。いつ死ぬかも分からぬ戦国の世とは全く異なる泰平の世が永く続き、鹿児島でも言語・容貌を正したり喧嘩・口論を戒めたりする藩主の達しが出る（『倭文麻環』の「風俗一新総是君恩」などに見える）など、戦国の遺風を粗野として排斥する風潮が高まるにつれて、逆に、義を貫き死を共にする堅い契りで結ばれ、互いに励まし合って文武両道にいそしむ、そのような関係を理想とする「若衆道」（男色の道）に憧れ、平田と吉田の二人を義兄弟の鑑として美化した伝承が形成されていった、と考えるのである。

3　「伊勢殿若衆文」のことなど

庄内の乱から百年経たのちに成立した『庄内軍記』は、財部の戦いを描いた後に、「わけて哀れに聞こえしは」として、平田三五郎の死を情感こめて語っている。これが『賤のおだまき』の成立に大きく関わることについては次節で考察するが、ここでは、『庄内軍記』より前に「伊勢殿若衆文」という文書が存在していたことが鹿児島県立図書館所蔵の『庄内軍記』の「拾遺」に見える（『天誅録拾遺』にも収めるが欠損あり）ので、それをまず取り上げる（表記を改めたところがある。〔　〕は引用者の注）。

世俗「伊勢殿若衆文」ト名ヅケテ、小児ノ弄ビ草〔『天誅録拾遺』は「笑草」〕ニ写シ伝フル一紙アリ。按ズルニ是嬌言嬉語〔「狂言綺語」が一般的〕ノ楽書ト見エタリ。其ノ詞フツツカニシテ取リ用フルニ足ラズトイヘドモ、平田・吉田戦死ノ事ハ併ラ其ノ実ヲ記スル者カ。故ニ其ノ詞ノ拙キヲ厭ハズ、其ノ事ノ実ナルヲ以テ之ヲ摘テ茲ニ記シ参考ニ備フルノ

ミ。

昨日ハ今日ノムカシ、平田三五郎ト申ス少人、吉田大蔵康時ニ知音〔恋情を通じること〕浅カラズ。一年〔ある年〕、隅州庄内ニテ康時討死ツカマツル。一騎当千ノ悴者〔原本「カセモノ」とルビ。家来の従者〕佐藤兵衛武任、彼ノ死骸ヲ肩ニ引キ掛ケ、味方ノ陣へ引キ退ク。後ヲ見レバ若武者一騎、卯ノ花オドシノ鎧ヲ着、甲ヲバ召サザリシカバ、ムカフセキ〔不詳〕毛ノ□ニ鎧ノ袖ニカカリシハ、サナガラ楊柳ノ風ニナビクガ如シ。武任ツクヅクト見テ、「宗次公〔『天誅録拾遺』は「宗次様」〕カ」ト申セバ、「何某」トノタマフ。「康時ハ打死」ト申ス。「コハイカニ」言フヨリ早ヤ馬ヨリ下ニ飛ンデ下リ、彼ノ死骸ニ抱キ付キ、嘆キ給フガ、合戦ニ隙ナウシテオクレシ事〔『天誅録拾遺』には「隙なければ、是までなりと言ひすてて、敵の陣にかけ入り、則ち打死なされし事」とあり〕前世ノ約束トハ申シナガラ、タメシ少ナキ次第ナリ。云々

按ズルニ此ノ文、実ニ伊勢殿ノ記ナリヤ否ヤ。蓋シ又往日〔『天誅録拾遺』は「往昔」〕ヨリ虚ヲ以テ虚ヲ伝ヘテ伊勢殿ノ作ニ名ヅクルカ。強テ其ノ作者ニ因ラズ、幸ニ事実ヲ採ル者ナリ。

○平田氏戦死ノ所、財部ノ内、見籠〔「荷籠」の誤りか〕ノ渡ナリ。其ノ塚、今ニ在リ。吉田氏ノ墓、又コレ有リ。此ノ文、已ニ「康時」ト記セリ。又、近ゴロ此ヲ聞クニ、隅州国分安楽氏ノ家ニ吉田大蔵直ノ状〔前述（④）の書状であろう〕コレ有リ、「清家」ト署スト云々。吉田氏ノ系譜ヲ按ズルニ、皆「清」ノ字ヲ以テ実名ト為ス。則チ此ノ説、拠有ル者カ。

○惣テ財部渡瀬等ノ事、諸々ノ旧記ニモ出デズ、又、前ノ編書ニモ之ヲ記サザル所ナリ。予〔自分は〕近ゴロ財部・国分等ノ古老ノ伝説ヲ聞キ、彼是参考シテ以テ本文ノ闕ケタルヲ補フ。故ニ其ノ事ニ於テ毫釐モ〔ごく僅かでも〕虚妄〔うそ偽り〕ノ説アラバ、

後人之ヲ正スヲ厭ハザルベシ。

引用された「伊勢殿若衆文」は、「昨日ハ今日ノムカシ」という書き出しが『賤のおだまき』の冒頭と同じであり、極めて注目される。その内容は簡潔ではあるが、『庄内軍記』の「平田三五郎戦死之事」に極めて近い（次節の（6）参照）。ただ吉田大蔵の名が「清家」ではなく「康時」となっているが、これについて橋口晋作氏[8]は、次のように述べている。

この記事は「拾遺」ではなく、二巻本『庄内軍記』の編著者の解説文である。それによれば、「伊勢殿若衆文」の吉田大蔵の名前を彼の書状の名前によって康時から清家と改めるなどして「平田三五郎戦死之事」は出来ているとのことである。（中略）「平田三五郎戦死之事」は「伊勢殿若衆文」の改訂版で当代「少人道」の理想像に迫ったものだったのであろうか。

これとは別に橋口晋作氏が紹介された『異本二巻本庄内軍記』[9]も、吉田・平田の戦死のことは『庄内軍記』とほぼ同じ（ただし、吉田の名は「康時」）であるが、二人が出陣に当たって書き置きしたのが「隅州敷根門倉の薬師堂」であること、それに続けて新納忠元の歌を載せていることなど、異なる伝承に基づくところが見られる）。

新納忠元の歌は、前述のように、『松操和歌集』では「若武者のうたれしなきがらを見て」とあり、『庄内軍記』では富山次十郎の死を悼んで詠じたことになっている。また、出陣に当たって詣でた堂も、『庄内軍記』は「或る辻堂」、『賤のおだまき』は「帖佐米山の薬師堂」となっているが、『三国名勝図会』では敷根（現在の霧島市国分敷根）の門倉にある「薬師堂」の項で、平田三五郎が歌を書き記したという異なる話（後述）を伝えている（吉田大蔵のことは書いていない）。

今一つ、『財部町郷土史』に引かれた『庄内治乱記』（現在その所在は不明）は、平田三五郎（名は「増近」）の奮戦ぶりを詳細に描いており、他の資料には見られな

い、全くの別伝である。

これらを見ると、前節末でも言及したように、平田三五郎の物語は、長年の伝承の過程でさまざまにふくらまされ創り上げられたものであり、『賤のおだまき』はその一つの結実した形である、と推測される。

4 『庄内軍記』の「財部軍之事」との関連

『賤のおだまき』の成立に『庄内軍記』上巻末の「財部軍之事　付、平田三五郎戦死之事」が大きく関わることを明らかにするために、以下、やや煩雑になるが、両者を対比・考察してみよう。

「財部軍之事」の章を、対比するのに適切な部分に分けると、次のようになる。

A　財部の戦いのこと
B　平田三五郎の死
C　平田三五郎の素性
D　平田三五郎の容色
E　平田と吉田の関係
F　討死した吉田の跡を追う平田
G　愛着の縁にひかれて
H　伴い行く冥途の旅
I　死のはかなさ
J　〈追記〉出陣の途次、辻堂に書き置く

これらA～Jの部分（パーツ）が、どうはめ込まれ、どう組み合わされて、『賤のおだまき』という物語がまとめられているかを検証するために、物語を七つの部分（場面）に分けて見ていく。

（1）物語冒頭の序に相当する部分
（2）平田三五郎のこと
（3）『庄内軍記』にはない、物語の創作部分
（4）庄内への途次に堂に書き置く場面
（5）財部の合戦の場面
（6）討死した吉田を平田が追う場面
（7）『庄内軍記』にはない、物語の結び

なお、『庄内軍記』からの引用は、その初めにA～Jの符号を付してどの部分かを示し、『賤のおだまき』と

異なるところには傍線を付し〔　〕にその異文を引く。また、『庄内軍記』には存在せず『賤のおだまき』が新たに加えた部分は、段落を改めて〔　〕に入れて示す。

（1）物語冒頭の序に相当する部分

初めに『庄内軍記』にはない、物語の語り出しの一文を置き、BとEをつないで二人の関係を示し（CとDは（2）に移す）、さらに死に至る経緯を簡潔に加え、HGと順序を入れ替えてここに移し、その後に一文を加えて序の部分を締めくくり、作品の主題を提示する。

〔昨日は今日の昔、庄内二年の在陣には、未だ二葉の若衆より、国に杖つく老いの身も、名を一戦の功に惜しみ、おのおの子路が纓を結び〕

B親を〔に〕先立・〔ち〕子に後れて〔ナシ〕袂を絞る人もあり、主を討たせ〔失ひ〕兄弟に別れて〔を討たせ〕胸を焦がせる族もあり、別離〔離別〕の愁ひとりどりなりしに、わきて哀れに聞こえしは、平田三五郎宗次なり〔といへる少人〕

E吉田大蔵清家に男色の好み浅からず、共に故郷を出でしより、片時も側を相去らず、征鞍山路を分くる日は〔も〕同じく迷ふ馬蹄の塵、軍旅野外に屯せば、同じ褥の仮枕、共に詠むる夜半の月、

〔影のごとくに伴ひしが、清家先に討死しければ、死なば共にと契約の言葉を違へず、宗次も、今年三五の秋の露、消ゆるぞ花の名残にて〕

H同じ戦土の苔の下に百歳の身を縮め、独り越えなん冥途の旅、伴ひ行くこそ哀れなり〔わりなけれ〕。

Gされば、弓矢取る身の習ひ、高きも賤しきも〔高きも賤しきも、弓矢の家に生まれては〕、義のために命を捨つるは武士の本意〔習ひ〕といひながら、これはまた、ためしなき〔少なき〕愛着の縁に引かれて、

〔義理と色とに捨てし身の、心の程こそやさしけれ。〕

（2）平田三五郎のこと

序に相当する部分のあと、改めて物語の主人公を紹介するために、まず「いでや由来を尋ぬるに」と話題を転換し、『庄内軍記』のCとDをここに移すが、表現の簡略なところを詳しくし（すでに（1）で用いた、討死の時の年齢を示す「今年三五の」は削除）、三五郎の人物像を描き出して、物語の発端とする。

〔いでや由来を尋ぬるに、かの平田三五郎公といふは、御当家島津の累代執権職たりし〕

C是は〔ナシ〕平田太郎左衛門尉増宗の息男とかや。〔鎧着初めのころよりも気量骨柄人に超え、末頼もしく見えたりしに、日に増し月に随つて、花の面影吉野山、峰の桜か〕

D今年三五の〔ナシ〕秋の月、雲間を出づる風情より、なほあでやかに麗しく、容色無双の少人たり。

（3）『庄内軍記』にはない、物語の創作部分

平田三五郎が「容色無双の少人」であったという叙述（2）を受けて、

〔されば、そのころ国家乱世の折なれども、さすがに耐へぬ人心、いつかそれぞと見初めては、三五郎公に命を捨て、…〕

と、美少年平田三五郎に憧れる人々が多かったという叙述から始めて、『庄内軍記』には存在しない、三五郎の十二歳から十五歳夏までの物語（それは吉田大蔵との関係の歴史でもある）の世界へと展開していく。

この部分がどのように創作されたかについては、次節で改めて考察する。

（4）庄内への途次に堂に書き置く場面

『庄内軍記』では、財部の戦いでの吉田・平田の二人の死を描き終えた後に、「追記」の形で、財部へ赴くとき或る辻堂の柱に書き置きした話（J）を記すが、その前半部は次のようになっている。

J（前半）件の二人首途して財部へ赴くとき、或る辻堂に逍遥して、「平田三五郎宗次、吉田大蔵清家、共に庄内一戦の旅に赴く」と、堂の柱に書き付けけるこそ、末の世までも留まりて、

しかし、『賤のおだまき』では、物語の流れに沿って描くために、庄内の乱の発端から吉田・平田の義兄弟も出陣することになった経緯を記し、その後に、「隅州帖佐を通るとて、武運のために米山薬師に参詣し」たところ、その堂の左の柱に、文禄の役の折に虎狩で虎にかまれて死んだ帖佐六七の歌（命あらばまたも来て見ん米山の薬師の堂の軒端荒らすな）が書き残されているのを見て感嘆し、

〔我らも今度の合戦は、千に一つも生きて帰らんとは思はれじとて、清家やがて矢立を取り出だし、すなはち堂の右の柱に「時に慶長四年己亥六月十日、平田三五郎宗次、吉田大蔵清家、共に庄内一戦の旅に赴く」と書き付けてぞ立ち出でける。〕

と叙述している。「或る辻堂」を「帖佐…米山薬師」と改めたのは、「勇猛無双の勇士」にあやかる作意によるものであろう（敷根の門倉薬師とする別伝もあるが、これについては後で触れる）。

右に続くJの後半部は、次に示すように、『賤のおだまき』も（つなぎのために初めに〔　〕の部分を補っているが）ほぼ同じである。

J（後半）〔後にかの両雄が戦死して〕その身は苔の下に朽ち、野外の土となりぬれど、佳名は身後に〔死後にとどまりて、末の世までも〕残りつつ、見る人袂を絞り得〔敢へ〕ず。げにや「龍門原上の土に〔ナシ〕骨を埋めて名を埋めず」とは、かかることをや申すらん。

（5）財部の合戦の場面

『庄内軍記』のAの部分は「財部軍之事」の章のメイ

ンであり、初めに位置するが、『賤のおだまき』は、物語の時間的経過に沿って後の方に移す。しかし、内容はほぼそのまま（一部に簡略化したり補ったりしたところもあるが、吉田の奮戦の様子は補っていない）を用いて、合戦の描写としている。

Aここに伊集院甚吉と猿渡肥前守が楯籠る隅州財部の城といふは、都城の〔十二城の一つにして、逆徒の張本忠真が居城、都城より〕西に当たつて、その間僅かに一里に過ぎず。また、忠真が股肱の臣、白石永仙・〔と〕伊集院五兵衛尉らが楯籠る安永の城を隔てたれば、在陣の勢どもは寄せて攻むるに道〔手便〕あらず。

これより隅州浜之市へ一筋の山路あり。義久入道龍伯公は富隈の城におはしければ〔けるが〕、辺境の固めとして新関を据ゑて敵の襲来を防がるべしとて〔公御賢慮ありて〕途中渡瀬といふ所に関所〔新関〕を構へて〔据ゑて敵の襲来を防がるべしとて、一陣を構へて〕市成隼人助武重、弟藤助武明〔兄弟〕に、かの警固を勤むべしとて御勢を添へられしかば、武重兄弟渡瀬に至つて二か所に陣を構へて〔命ぜられ〕かの関所〔御陣〕を相守る〔守らせらる〕。また、財部白毛峠よりも一つの遍路〔通路〕ありければ、ここへは伊地知周防守一陣を構へ〔君命を受け〕て相守れり。故に〔然るに〕かの両陣へ敵の勢〔兵〕ども襲ひ来たり〔ナシ〕て、小軍〔小攻合ひ〕度々に及ぶとかや〔及びしとぞ〕。

かかりしかば〔かかるところに、秋の末つ方〕龍伯公財部を攻め給はんとて、自ら御馬を出させ給ひ、白毛峠に御陣を据ゑられ、財部城を攻めさせ給ふ。〔の命によつて〕山田越前〔越前守有信〕入道利安〔理安〕、軍大将を承りて〔ナシ〕、三軍の機を司る〔司りて財部の城を攻めにける〕。已に〔既に巳の刻より手合せして〕寄せ手の軍兵ら業ケ迫まで〔秘術を尽くして〕攻め入る時〔ければ〕、敵軍急に打つて出て〔城兵も共に武功の者どもにて〕ここを専途と禦ぎ戦ふ。

ここに〔中にも〕忠真が家臣・〔に〕瀬戸口石見といふ者は、鉄砲〔屈竟の鳥銃〕の上手なるが、緋縅の鎧着て、岸の小松を楯に取り、寄せ来る勢をぞ射たりける。これに依つて〔ければ〕味方の勢・〔ども〕左右なく近づき得ざりしに、讃良善助・〔某〕鉄砲〔これを見て、十匁の鳥銃〕を放ちて是を射る〔射たりける〕に、あやまたず石見が真中を射通しければ、俯しざまに倒れて、岸より下に落ちんとす。長曽我部甚兵衛走り来て、石見を取つて引き上げ、味方の陣へ〔に〕助け入れんとする所を、あひもすかさず射る〔また撃つ〕鉄丸にて〔鳥銃に長曽我部が〕腰に差したる団扇を微塵に射砕きたりけれども、ものともせず、石見を助けて本陣にぞ〔に〕帰りける〔しは、あつぱれ勇々しく見えにけり〕[10]。

これを・〔軍の〕初めとして、敵味方縦横に〔互ひに〕入り乱れて〔乱れて巴のごとくに切り廻れば、十文字のごとくに駆け立つる。〕天地を動かす鬨の声・〔は〕山岳に響き〔もこれがために崩れ〕鉄筒の音〔射交ふる鳥銃の音、打ち合ふ太刀の鍔音は〕おびただしとも言ふばかりなし〔ただいま天地も裂くるばかりなり〕。

巳の刻より申の刻まで火出づるばかり戦ひければ〔ナシ〕、寄せ手〔味方〕に吉田大蔵清家〔ナシ〕、平田仁左衛門尉、宮内治部ら討死す。その他、両陣〔両方〕諸共に討死手負〔手負死人は〕数知ら〔知れ〕ず。

右の引用の最終段落に挙げられた寄せ手の死者の中から『賤のおだまき』は「吉田大蔵清家」の名を削除しているが、これは吉田と平田の死を描く次の部分（6）との関係を考慮しての処置であろう。

（6）討死した吉田を平田が追う場面

『庄内軍記』は「財部軍之事」（A）の後に「平田三五郎戦死之事」を付載するので、まず三五郎の紹介や吉田との関係を述べ（B～E）、その後に吉田・平田の討死

のこと（F）を続けている。しかし、『賤のおだまき』は、すでにB・Eは序に相当する部分（1）に、C・Dは平田三五郎の紹介の部分（2）に移しており、財部の合戦のこと（A）に続けて二人の死の場面（F）を描くために、新たなつなぎを加えている。

また、Fの後のG・Hの部分を『賤のおだまき』では序に相当する部分（1）に移したので、新たな締めくくりを置いてIにつなぐ。

〔ここに吉田大蔵清家、平田三五郎宗次は、いつも互ひに寄り添うて、駆け引き共に両人は、形に影の従ふごとく、毎度手柄を顕しけるが、今日も今朝よりもろともに〕

F況んや合戦の場までも〔ナシ〕一つ道にと志し、諸共に〔両人つれて〕進まれしが、合戦に隙なうして思はずも〔心ならずも〕押し隔てられ、清家遂に討死す。一人当千の郎等に佐藤兵衛・〔尉〕武任といふ者〔ナシ〕彼の死骸を肩に掛け、味方の陣に引き退く。後ろを見れば、宗次は卯の花縅の鎧着て、甲をば〔わざと甲は〕召さざりしかば〔しが〕、嬋娟たる顔に髣髴たる鬢の毛の鎧の袖まではらはらと乱れかかりし有様は、さながら楊柳の春風に靡く風情なり。清家を尋ねかねたる有様にて、茫然として立ち給ふ。

武任これを〔うち〕見て、「宗次公にて候〔さま〕か」と問へ〔問ひけれ〕ば、「清家はいかに」と宣ふ。「はや討死」と答へければ、「こはいかに、あさまし」と、馬より下に飛んで〔飛び〕下り、そのまま死骸に抱きつき、発露涕泣し給ふが、「よしよし、今は力なし。合戦に隙なうして後れしこそ無念なれ。今は〔今生の対面〕これまでぞ〔なり〕。武任さらば」と言ひ捨てて、また馬にうち乗り、・〔すなはち〕敵陣に駆け入つて、忽ち古井原上の草葉の末の露霜と消え・〔果て〕給ふこそいたはしけれ。

〔あはれなるかな、宗次は、今年やうやく三五の年、十年余りの春秋はただ一時の胡蝶の夢、

覚めて義を知る武士の弓矢の道ほど、世の中にわりなきものはなかりけり。」

Ⅰつらつらこれを観ずるに、春の朝の花の色一陣の風に誘はれて、秋の夕べの紅葉〔紅葉々〕の一夜の霜に移ろひて、あだに散り行く風情より、なほはかなくぞ見えに〔覚え〕ける。

（7）『庄内軍記』にはない、物語の結び

『賤のおだまき』は、これまで見てきたように、『庄内軍記』の「財部軍之事」の章を基にしているが、新たな創作の部分（3）を含む作品であり、吉田・平田の義兄弟としての関係の始終を物語ったものであるから、最後に作者の感慨を述べて物語の「結び」としている。

その内容は、二人の義兄弟としての生き方を称賛し、今の世の人もこの二人を手本として文武に優れた士に馴れ親しみ堅い契りを結ぶことを勧めるが、ただ色道にのみ溺れては国を滅ぼし身を破ることになると戒め、この物語の意義に言及して結ぶ。

5 『賤のおだまき』の創作部分

『賤のおだまき』の成立に『庄内軍記』の「財部軍之事　付、平田三五郎戦死之事」が大きく関わることを検証してきたが、その関わりは、いわば骨格部分のみであり、二人の人物像も、その出会いも、関係の経緯も、何一つ明らかではない。それを補うべく創作し物語化を図ったのが、先に指摘した（3）の部分である。

その内容を整理すると、次のようになる。

①《美少年・平田三五郎に憧れる者多し》〔前節の（2）を受けて〕三五郎に恋い焦がれる者は多かったが「一夜だに契りし人」はいない。

②《倉田軍平からの文を破棄》**慶長元年**に「二六の春」を迎えた三五郎を恋い慕う倉田が文を遣るが、三五郎は一目見るなり破り捨てる。

③《危難に遭い、奇跡の出会い》**慶長二年**一月七日に角入れ（半元服）を許された三五郎（十三歳）は、同月十二日に吉野へ小鳥狩りに行く。倉田はその帰途をねらって力づくで「本意を達せん」とするが、

通りかかった吉田大蔵によって危難を救われる。

④《義兄弟の契りを結ぶ》吉田大蔵は「武士の手本」と称えられた若者（二十三歳）であるが、三五郎と出会った日から「恋ふる心の一筋に今は命も絶えなん」と悩み、思い切って一月末に三五郎の家に赴く。三五郎もまた吉田を思って眠れぬ夜を過ごしていたので喜んで迎え入れ、遂に二人は義兄弟の契りを結ぶ。

⑤《姦計による疑惑も解けて起請文》二人の仲を妬む石塚十助が偽作した手紙（二月八日付け、加納八郎から吉田宛て）を見た三五郎は、吉田の心変わりを疑い義絶しようとしたが、吉田の情理を尽くした言葉に納得し、互いに血判した起請文を交わし「兄弟の契りはいよいよ深く」なる。

⑥《吉田の朝鮮出陣、哀しい別離》文禄の役から一旦帰国していた義弘公が再び出兵することになり、その供を命じられた吉田は、三五郎と名残を惜しみつつ、二月二十一日に出陣する。

⑦《石塚の威に屈せず節を守り抜く》独り残された三五郎は、吉田の無事を祈って諏訪大明神に日参する。**慶長三年**三月下旬のこと、石塚十助は仲間を誘い威を以て迫ったが、三五郎は一度も不覚を取ることがなかった。

⑧《吉田の活躍、帰国して再会》慶長の役から退陣する折に、薩摩の将兵の乗った軍船が朝鮮の南海島に漂着したが、吉田大蔵は小舟に乗って唐島の義弘公に救援を求め、五百余人の命を全うする功をあげた。吉田は十二月中ごろに帰国、三五郎と久しぶりに再会し「昔に勝る兄弟組、片時も側を離れず」過ごす。

⑨《庄内の乱に二人連れだって出陣》都城の城主・伊集院忠真は、父幸侃が誅殺されたことを恨み、島津氏に反逆して庄内の乱が勃発。吉田・平田の義兄弟も**慶長四年**六月十日に鹿児島を発って出陣。〔以下、前節の（4）に続く〕

これらの内容は、財部の戦いで二人が死を共にして義

を貫いたという感動的な出来事を原点としてさかのぼり、時の流れに沿って物語ったものであるが、その創作に当たって留意したと思われるのは、次の三点である。

（1）出会いの時期

平田三五郎が財部の戦いで討死した年齢を、『庄内軍記』も『賤のおだまき』も十五歳としている（『三国名勝図会』は十六歳）。これを原点としてさかのぼり、二人の出会いをいつとするか、創作上の一つの問題であろう。作者は「角入御免」を蒙り半元服を許された十三歳を出会いの年とし、その前年（慶長元年）から物語を始めることにしたが、この構想は、出会い（③）から吉田の朝鮮出陣（⑥）まで、僅か一か月余の間にさまざまな出来事を盛り込むという、かなり無理な設定になっている。

（2）吉田大蔵の朝鮮での活躍

朝鮮から退陣する時の吉田大蔵の活躍（⑧）は、『征韓録』『西藩野史』『島津国史』にも記されている史実であり、吉田の人柄を示すものであるから、文禄・慶長の役のこと、吉田の出陣、二人の別離と再会は、物語中に盛り込み位置づける必要があった。

（3）恋の物語のパターン

恋の物語には基本的な型がある。出会い、契り、堅く結びあう仲になるプロセスの間に、さまざまな抵抗や悪巧みによる危機、疑惑や嫉妬、やむをえぬ別離などがあり、そういう苦難を乗り越えてこそ深い契りの仲になる、というパターンである。『賤のおだまき』の創作部分は、まさにそのパターンによって、倉田軍平や石塚十助を登場させ、さまざまな出来事（②③⑤⑦）を起こさせて、物語を展開している。荒くれ者に襲われて危機一髪というところを通りかかった人に助けられるという出会い（③）もまた、典型的なパターンである。

『賤のおだまき』の構想について今一つ触れておきた

いのは、財部への出陣の途次に詣でた堂のことである。先述のように、『庄内軍記』に「或る辻堂」とあるところを、『賤のおだまき』は帖佐（現在の姶良市姶良町鍋倉）の「米山薬師」としているが、これには別伝も存在する。

『三国名勝図会』の「大隅国曽於郡敷根」（現在の霧島市国分敷根）の「薬師堂」の項には、次のような記述がある（表記を改め、〔注〕を加えた）。

薬師堂　敷根村日州通道、門倉坂の北側にあり。俗に門倉薬師と呼ぶ。（中略）慶長四年、庄内伊集院忠真を御征伐の時、兵士この堂に集まり、各その志を述べて文句を前後左右の板壁等に題しける。そのうち、平田三五郎宗次は、姿容秀麗にして美少年の名高かりしが、年十六にて従軍し、この堂に来たりしに、衆人既に題書してその板壁の低き処は書すべき隙なかりければ、家丁〔原本のルビ「ケライ」〕に捧持せられて、その最高の所に自詠の和歌を題しける。その歌に言ふ。

書き置くは形見ともなる筆の跡　我はいづくの土となるらん[11]

かくて宗次は庄内の役に戦死しける。その板壁は衆兵の題書長く残りし故、本府俠少年の徒、遠路を歴て来たり見る者多かりしとぞ。中に就いて平田宗次が題詠を見る、老少となく皆感泣を催しけるとかや。然るに、往時瑞慶寺〔この薬師堂を所管する寺〕より堂の内外すべて黒く塗りければ、今は片言隻字も見えずとなり。この題書は古風なるものなりしに、誠に惜しむべき事と謂つべし。（下略）

ここには吉田大蔵のことはなく、三五郎の年も十六となっている。『異本二巻本庄内軍記』も、「件の両人首途して庄内に赴く時、隅州敷根門倉の薬師堂に参詣し」としており（歌はない）、そのような語り伝えもあったのであろう（次に記すように平田三五郎が国分に関わりのある人物なら、門倉薬師が妥当）が、『賤のおだまき』は、先述のように、虎狩で死んだ勇士・帖佐六七にあやかって、意図的に改変したと考える。

6　人物造型ならびに構想の破綻

（1）平田三五郎

『賤のおだまき』の主人公・平田三五郎は、物語成立の基となった『庄内軍記』から「是は平田太郎左衛門尉増宗の息男とかや」とされており、『賤のおだまき』ではさらに「御当家島津の累代執権職たりし」という修飾語が加えられている。ところが、『本藩人物誌』は「平田三五郎宗次」の名の下の割注に「太郎左衛門増宗ノ子トイフハ誤レリ　子孫国分ニアリトモイヘリ」と記している。(12)

その『本藩人物誌』の「平田増宗」の項（巻十三・国賊伝）に付された子息の伝には、

増宗嫡子、新四（一本「次」）郎宗次〔母ハ上井覚兼女〕慶長七年八月十七日、野尻ニ於テ横死。年十七。二男、新三郎行宗、慶長十五年十一月十五（一本「九」）日、筑前海上ニ於テ疾風覆船時、自殺。年十九。三男ハ出家。父ノ罪科ニ依リ琉球勝連島ヘ配流。四男、治部卿、硫礦島ヘ配流ナリ。（引用に当たって句読点を付し、表記を改めた）

とあり、三五郎宗次のことは記されていない。

鹿児島大学玉里文庫蔵の『庄内陣記』の頭注には、「平田三五郎ハ国分郷士平田仁左衛門祖也」とあり、前述の『旧記雑録』八五五に名を記された人の中に国分衆や富隈衆と思われる人（『「さつま」歴史人名集』による）が見える。また、『財部町郷土史』や『国分郷土誌』には、財部町南俣にある平田三五郎と宮内式部の墓に、国分・隼人の平田・宮内家の代表の人々が毎年彼岸の中日に墓参に来ている、という記事がある。これらを見ると、前引の島津義久の書状（『旧記雑録』九二四）で特に平田・宮内・吉田の死を取り上げて書いているのは、この人たちが国分や隼人に関わりがあり、義久も知っていたからではないか、と思われる。

以上の諸点を考え合わせると、平田三五郎宗次を家老平田増宗の息男（住居は鹿児島城下の「玉龍山のこなた」）とするのは、伝承の過程で虚構されたものである、ということになろう。家老の子とすることによって、家

柄と育ちの良さを示し、父の慈愛を受け、鎧着初めのころから気量骨柄人に超え、文武両道に秀で、節を守り義を貫く、申し分のない美少年であった、という人物像が形成されることになる。

(2) 吉田大蔵

平田三五郎と義兄弟の契りを結んだ人物は、『庄内軍記』でも『賤のおだまき』でも「吉田大蔵清家」とあるが、先述のように「伊勢殿若衆文」や『異本二巻本庄内軍記』は「吉田大蔵康時」と名を異にする（『島津国史』も。ただし、割注には「清盛」もあげ「蓋一人而改名云」とする）。

ところが、『薩藩旧伝集』（巻二）所収の「本藩中興臣行業録」は「清家」も「康時」も誤りとして、

吉田大蔵清盛〔一本作清家、或康時、皆非〕
一、清長子、母島津周防守忠続女
一、高麗御供（「泗川追打の時…」と「番船破の時…」を略）
一、庄内乱之時、於財部、平田三五郎と共に戦死。年弐拾八歳。法名薫山了香庵主。墓、南林寺にあり。

と記し、名は「清盛」、没年は「弐拾八歳」としている（『称名墓誌』や『本藩人物誌』も同じ。『賤のおだまき』が二人の出会った時の吉田の年齢を「行年ここに二十三」とするのは、物語上の創作であろう）。

先に引いた島津義久の書状（『旧記雑録』九二四・九二五）や『西藩野史』は「吉田大蔵」のみで名はなく、児玉利昌譜と安楽家蔵の書状（『旧記雑録』八五五・八五六）に見える「清家」を実在した吉田の名とすべきかとも考えるが、それを「非」とする説を否定する根拠もない。

右のように史実を確かめ得ないところもあるが、『賤のおだまき』の「吉田大蔵清家」は、実在の人物を基に創り上げられた物語中の人物であり、「太守公にも別して御秘蔵に思し召し、『武士の手本は大蔵なり』と折々御賞美ありしほどの者」で、若手の武士たちが憧れ配下

になることを望んでおり、慶長の役で目覚ましい活躍をした、平田三五郎にふさわしい兄貴分として造型されている、ということになろう。

（3）構想の破綻

『賤のおだまき』には、物語の構想に関して見逃すことのできない大きな問題がある。それは、二人の出会い（慶長二年・一五九七年）以前に吉田大蔵が朝鮮に在陣したかどうか、ということである。

吉田と平田が契りを結んでから十日余り後の慶長二年二月のこと、石塚十助の悪巧みによって三五郎は吉田の心変わりを疑い、義絶しようとまで思うが、吉田の理にかなった説得で疑いがとけ、起請文を交わすことになり、吉田が三五郎に腕を刺し通させて血判をする場面で、三五郎が白手拭を引き裂いて吉田の腕を巻きつつ「痛みは強く御座なきや」と聞くと、吉田はこう答える。

何でふこのくらゐの小疵に痛むことの候はんや。去年朝鮮在陣の時、左の腕に毒矢を射られ、その疵は癒え候へども、少し武芸にても修練の時は、必ず悪血滞りて心地悪しくも候ひしに、今こそ腕も素軽く覚えて、痛みは少しも御座なく候。（二七ウ）

いま一つは、上記の場面から十日余り後のことである。豊臣秀吉の命により文禄元年（一五九二年）に朝鮮に出兵した島津義弘は、文禄四年五月に子息の忠恒（後の家久）らの将兵を朝鮮に残して帰国していたが、慶長二年（一五九七年）二月、再び朝鮮への出兵を命ぜられ、吉田大蔵も出陣することになり、三五郎と別れを惜しむ場面で、吉田は関孫六兼基の打った刀を与えて、こう言う。

これは先祖代々伝来の太刀にて、殊には去年朝鮮にて数人の首を切り候ふに、水もたまらぬ大業物にて、それがし、これまで一度もこの刀にて未だ不覚を取らず、別して秘蔵に候へども、今度離別の御名残に君に進呈いたすなり。もしや、それがし高麗にて討死いたし、異国の土ともなり候はば、これぞ清家が形見とも御覧候へ。（三一ウ）

この二つの場面の吉田大蔵の言葉に出てくる「去年」は、慶長二年の前年、すなわち慶長元年のはずである。だとすれば、吉田はその年の内に軍勢から抜けて帰国していなければならないが、果たしてそのようなことが可能だったろうか。もし義弘が一旦帰国した折に供をして帰ったとすれば、それは文禄四年のことであり、吉田が毒矢を射られたり敵の首を切ったりしたのは「一昨年」以前のことでなければならない。

この「去年」は「去ぬる年」で、過去のある時点を指すとは読めないかとも考えたが、そのような例は見出せない。この作品の中でも、慶長三年になって、石塚十助が吉田の留守を幸いとばかり三五郎に手紙を送った場面に、「去年、朝鮮御出陣のみぎりは病気によつて御供の人数に洩れたりしが」（三六オ）とあるのは、まさしく前年の慶長二年を指しており、「去ぬる年」ではない。

このように見てくると、慶長二年の場面にある「去年」はその前年のことであり、その年（文禄五年。十月に改元して慶長元年）に吉田が朝鮮に居て毒矢を受けたり敵の首を切ったりしたとするのは無理があろう。これは吉田大蔵の武勇のほどを示そうとしてのミスであり、財部の戦いでの二人の死からさかのぼって物語化するに当たっての構想の破綻である、と言わざるをえない。

7　成立の時期

『賤のおだまき』の成立について、いろいろな角度から考察してきたが、その成立の時期は明らかではない。

『賤のおだまき』の現存写本は極めて少なく、しかも奥書を持つものはないので、伝来の過程を知ることはできないが、かつて「さんぎし」（薩摩文化月刊誌）に浜田亀峰氏が紹介し、その翻刻を連載（昭和三十三年五月から翌年八月まで十六回）された、川内市（現在の薩摩川内市）向田町の山田哲氏旧蔵の『賤の男玉記』（残念ながら現存せず）の奥に「安政四年十二月廿四日　佐多直次郎」とある由なので、安政四年（一八五七年）以前に成立したことは間違いない。

それでは、古くはどこまでさかのぼれるだろうか。『賤

のおだまき』の成立に大きく関わる『庄内軍記』は、その巻頭の「庄内軍記伝」に「慶長ヨリ今ニ到ルマデ殆幾一百年」（原漢文）とあるので、一七〇〇年ごろの成立と思われる。また、『賤のおだまき』が文禄・慶長の役や庄内の乱に関して参考にしたと思われる『西藩野史』には宝暦十年（一七六〇年）の自序があるので、『賤のおだまき』の成立はそれ以後ということになろう。

今一つ注目したいのは、帖佐六七が米山薬師堂の柱に書き残した歌（4の（4）参照）のことである。吉田・平田の二人が財部の戦いに赴く途次、この歌を見て感動し、自らも書き置くことになるのだが、『賤のおだまき』の作者が何からこの歌を引いたかは不明である。ただ、地誌の類では『薩藩名勝志』の「米山薬師堂」（始羅郡帖佐）にこの歌が引かれており、これを参考にしたとすれば文化三年（一八〇六年）以降ということになる。これを受けて補い集大成した『三国名勝図会』（完成は一八四三年）も「米山薬師堂」にこの歌を引いているが、同書は、前述のように、平田三五郎が財部への出陣の折に詣でた堂を敷根の門倉薬師（吉田大蔵は同道していない）としているので、『賤のおだまき』との直接の関係は考えにくい。[12]

以上の諸点を勘案すれば、極めてあいまいではあるが、『賤のおだまき』の成立は十九世紀前半のある時期ということになろう（「1　作者」で引いた伊藤仙平戯作説が正しければ十八世紀末ということになるが）。

【注】

（1）森鷗外『キタ・セクスアリス』、坪内逍遙「当世書生気質」、徳田秋声『思ひ出るまゝ』。他にも、内田魯庵『社会百面相』・田岡嶺雲『数奇伝』・巌谷小波『五月鯉』などにも引かれていることは、氏家幹人氏の『武士道とエロス』（講談社現代新書）や『江戸のエロスは血の香り』（朝日新聞出版）に詳しい。また、明治時代の若者たちにこの物語が迎えられたことについては、前田愛氏「『賤のおだまき』考」（成蹊国文・3号）や小森陽一氏「日本近代文学における男色の背景」（文学・一九九八冬）などの論考がある。

（2）この書名の表記は写本・刊本などによって、「賤之麻玉記」「賤の緒玉記」「賤の男玉記」「賤のをだまき」「賤のおだまき」「賤の小田巻」など、さまざまであるが、本稿では（歴史的

仮名遣いとは異なるが）明治以降の多くの刊本の表記に従って、『賤のおだまき』とすることにした。

（3）『両性具有の美』（新潮社）所収の「賤のをだまき」。

（4）「平田三五郎物語の流れ」（鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報・一八号＝一九九〇年）

（5）訓読に当たって宮野直也氏の教示を得た。

（6）『本藩人物誌』によれば、児玉利昌は、国分において御船奉行・兵具奉行を勤め、姶良地頭となった。平田宗応は、本城の地頭、天正十六年の島津義久上洛の御供、文禄・慶長の役に参戦、関ヶ原で戦死。安楽大炊介（『庄内陣記』に「富隈衆」とあり）は、数々の軍功あり、庄内の乱の折には龍伯公（義久）の使者として活躍した。前原平兵衛は未詳であるが、『「さつま」歴史人名集』に「前原隠岐守、富隈衆、慶長四年、庄内陣に出陣。同一〇年、国分衆中」とある人か。

（7）五味克夫氏・内倉昭文氏の教示を得た。

（8）注4に同じ。

（9）「翻刻　異本二巻本『庄内軍記』上巻」（鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報・一九号＝一九九〇年）

（10）『庄内陣記』は、この後に「古井屋ケ代ノ原」と「荷籠ノ渡リ」の戦いのさまを描き、吉田らの討死のことを記すが、平田三五郎のことは全く記していない。

（11）この歌のことは三上喜孝氏『落書きに歴史をよむ』（吉川弘文館）に詳論がある。

（12）桐野作人氏の教示を得た。

（13）『三国名勝図会』が『庄内軍記』に拠ったことは、「平田三五郎墓」に明記している。

【文献一覧】（引用に当たって表記を改めたところがある）

○賤のおだまき＝鹿児島県立図書館・東北大学狩野文庫・都城市立図書館・その他の現存写本と明治十七年以降の刊本六種を校合して定めた本文に拠る。本文の所在は鹿児島県立図書館本の丁数によるが、一〇丁目の白紙は丁数に入れない。○庄内軍記＝鹿児島県立図書館の写本・都城市立図書館刊行のプリント版。　○異本二巻本庄内軍記＝注9参照。　○庄内陣記＝鹿児島大学玉里文庫の写本。　○天誅録拾遺＝鹿児島県立図書館の写本。　○旧記雑録＝鹿児島県史料。　○島津国史＝明治三八年の刊本。　○西藩野史＝新薩藩叢書（一）。　○本藩人物誌＝鹿児島県史料集。　○称名墓誌＝新薩藩叢書（三）。○征韓録＝鹿児島県立図書館の写本。　○薩藩名勝志＝鹿児島県史料集。　○三国名勝図会＝青潮社の翻刻本。　○盛香集＝新薩藩叢書（三）。　○松操和歌集＝鹿児島県立短期大学地域研究所叢書。　○倭文麻環＝明治四一年の刊本。○財部町郷土史＝財部町教育委員会。　○国分郷土誌（平成九年）＝国分郷土誌編纂委員会。　○「さつま」歴史人名集＝稲葉行雄（高城書房出版）。

〔付記〕『賤のおだまき』は、前田愛氏（注1参照）が言われるように「まともに論ずるに足る作品ではない」が、

江戸時代末期の鹿児島で作られた物語であり、明治初期の東京で若者たちに広く読まれたという歴史的意味と、史実を基に生まれたさまざまな伝承が一つの物語としてまとめられていく過程に対する関心とが、この論考を進める動機となった。このような小論の「研究紀要」への掲載を許された志學館大学に感謝申し上げる。